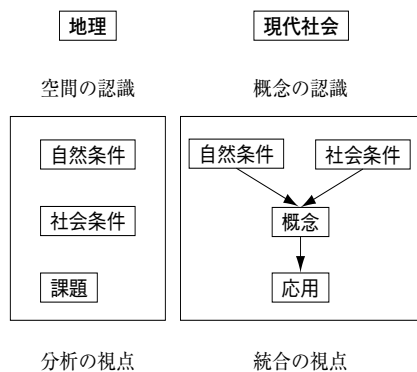


北アフリカ編

広島県立五日市高等学校 高林 賢治

1. 現代社会の授業の問題点

現代社会の授業には二つの問題がある。一つは生徒の空間認識の欠如と、現代社会という科目の捉え方の混乱である。高校の教員としては中学校で地理は十分やってきているのに、実際に世界地図や日本地図を描かせてみると驚くほど描けないという印象がある。これは中学校の地理の学習内容でもとりあげる地域の選択が行われており、教師側の期待する知識がないことも関係するだろう。しかし、世界や日本の空間認識がないことは、世界や日本の関係を抽象的な概念モデルに落とし込んで理解させる現代社会の学習の阻害要因となる。二つ目の現代社会の捉え方であるが、たとえば環境問題については、公民科と地歴科とはアプローチが異なる。公民科では環境問題を概念モデルとして認識させ、自分たちの行動に応用させるのに対して、地歴科では実証的に事実を分析し認識させる。地歴科から見るとそのつながりに違和感を感じるのではないか。図で示すと以下ようになる。



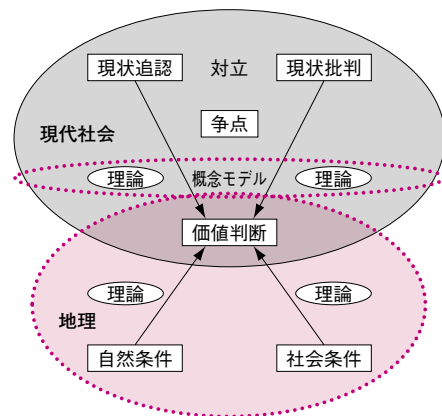
2. 解決の糸口

しかし、現代社会に地理の空間認識が加味されるとどうであろうか。たとえば、ツバルの写真を象徴的に見せるのではなく地図を見ることで日本と異なる環境であることがわかる。また気候区分図やデータを使うことにより、結論が先にある抽象的な道德論から事実を中心とした問題解決学習へと姿を変える。さらに、軸足を自分の世界から社会に広げることができ、抽象

的な概念モデルがなぜ必要なのかを理解できる。すなわち、社会は、自分たちの生活の場とは異なる空間でできているので、理論化しなければ認識できないことがわかるのである。

では具体的にどのように展開すればよいだろうか。現代社会は課題設定を「現状追認」vs「現状批判」という対立の図式で行うことが多い。本稿では対立の図式により争点を明らかにし、地図を用いて空間的に分析を行うことにより、立体的に概念モデルを捉えて思考させることをめざした。

現代社会の諸問題は世界のいずれかで発生している。そしてそれは地図中のポイントとして見つけることができる。次にその地点は地形や気候などの自然条件に支配されており、特殊性を見つけることができる。一方、その問題が生じるに至るには普遍性のある人間の活動がかかわる社会条件が加わる。生徒は地図上でその条件を探究する。以上の観点から地図を活用することにより、環境問題の扱いも、環境問題はさまざまな要因で生じている、という概念的なモデルで整理するだけでなく、その要因が空間的な広がりを持つことになる。そのことにより、生徒はより具体的に思考し、概念モデルを習得することができるのである。地理と現代社会の関係を抽象的な概念モデルに示してみよう。



3. 概念モデルを用いた授業実践

(1) 今回、取り上げたのは北アフリカのサヘルであ

る。現代社会のオープニングとして地球温暖化などさまざまな地球環境問題が取り上げられる。サヘルは砂漠化が深刻化していると生徒に非常にわかりやすい印象を与える。一方で、アフリカそのものについては理解していないので、具体的に地図を丹念に見ながら学習するには新鮮である。

構成は2本立てである。「交易都市から観光都市に変わったジェンネ」「出稼ぎ農民が戻り苦境に陥るブルキナファソ」である。両者ともにサヘルであり、地球温暖化と人間活動の破綻により、住民の生活が困窮している。これを現地の視点で分析し「人間の生活は自然条件と社会条件があいまって変化する」ことを概念化する。これなら身近な問題に応用できるであろう。

(2) 事例1「交易都市から観光都市へ変化したジェンネ」

「ジェンネ」はマリのニジェール川沿いにある都市である。地図中には「ジェンネ」の旧市街と赤字で示されているとおり、観光都市であり、観光コースになっている。しかし「天国」という意味のこの都市は、紀元前からあり、チュニスの塩と南部の森林部のコーラの実の交易都市だった。それが、交通の便の都合でモプティという都市に取って代われ、さらに1980年代の温暖化によるニジェール川の水位の低下により交易機能を失い、取り残された町となった。



ジェンネの大モスク(マリ)『高等学校 新地理A 初訂版』口絵5

授業では、まず「ギニア湾岸の森林でとれるコーラの実とチュニスの塩を交易したいのだが、どのような交易路があるだろうか。」と地図を示し問う。

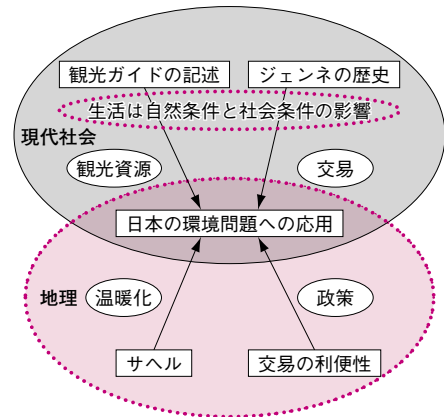
「この交易は古くから行われていたが、古い都市はないだろうか。」と問うと、「ジェンネ」が見つかる。そこでジェンネが交易に適したニジェール水系であることを確認する。

「しかし、ジェンネは現在観光都市としてかつての

イスラームのモスクなどを観光資源としており交易都市ではない。なぜだろうか。」

そこでサヘルであるという自然条件、近くのモプティという都市に交易機能が移動した社会条件、そして、地球温暖化によりニジェール川の水位が下がり水運ができなくなったという環境問題を示す。

生徒は、そこに暮らす人びとの生活の変化を想像し、自分たちの生活に置き換えて考えることができる。

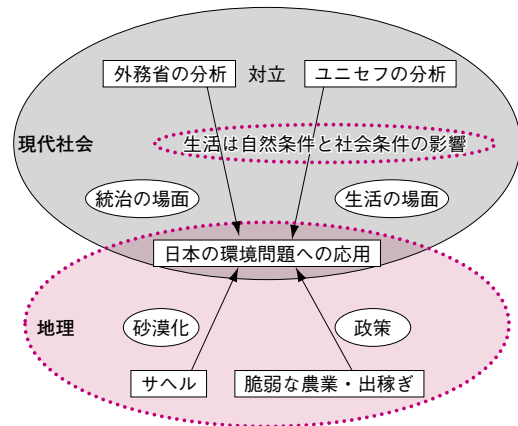


(3) 事例2「出稼ぎ農民が戻り苦境に陥るブルキナファソ」

事例1で検討したサヘルの砂漠化が進んだ地域での生活を検討する。ブルキナファソは、サヘルにある人口1373万の国家である。農業人口が91%と高く、おもな輸出品は綿花、繊維製品、ごま、シアバターであるから、乾燥に強い作物を産出していることがわかる。1人あたりのGNIは年間460ドルであり（日本は38410ドル）最貧国に位置づけられる（2006年）（『新詳高等地図 初訂版』以下地図帳、p.135を参照させる）。出生時の平均余命52歳、5歳児未満の死亡率は191人（1000人中）で世界第7位、新生児死亡率32人（1000人中）（ユニセフ資料）。ではどのように生活しているのかと問うと、外国へ出稼ぎに行くと考えることができる。実際、50万人ものブルキナファソ人がカカオの輸出で名高いコートジボアールに流出しており、移住農民となっている（地図帳、p.35「②サヘルの砂漠化と都市への人口集中」）。しかし、2000年の大統領選挙の際、コートジボアールではブルキナファソ人の排斥運動や虐殺が起こっており、そのため36万人が帰国した。この影響が、砂漠化が進む地域とあいまって混乱を巻き起こしている。

授業では、「シアバター(女子生徒は化粧品として知っている)」の生産地であることを示し、「美しい夕日

の写真、野生動物の写真」を見せる。また、外務省のホームページでは「政府は財政不均衡や国際収支の是正、民間部門の強化等各種政策を実施。1994年のCFAフランの切り下げ後もその衝撃を吸収するのに成功。西アフリカ諸国の中で比較的良好なパフォーマンスを見せている。2000年にはサブサハラで2番目にPRSP（貧困削減戦略文書）を策定。ブルキナファソによる経済改革、民主化努力は、世銀、IMF等を含む諸パートナーからも高く評価されている。」としてブルキナファソのがんばりを示す。



『新詳高等地図 初訂版』 p.35

その後、日本ユニセフ協会のアグネス・チャン大使のレポートを示す。

「気候変動のために、世界中で様々な問題が起こっていることは知っていました。でも、ブルキナファソの子どもたちがあんなに辛い状況に追い込まれてしまっているなんて…」

黄色く濁った池の水を牛と一緒に飲んでいた男の子。砂漠化で放牧や農業をする土地を追われた家計を助けるために、気温47度の灼熱の金鉱で埃まみれになりながら、ご飯も食べられずに一日中働き続ける幼い女の子。

同じ国家の見方をめぐって争点が生じているが、これだけでは、「助けなくては」という道徳的な感情論か、政府批判に終始する危険がある。そこで争点の分析に客観性を持たせるために地図帳を使った空間的な分析を行う必要がある。

さらに、人口が流出するのはなぜか、コートジボアールに出稼ぎしていた農民が戻ってきたのはなぜかという問いを考える中で（地図帳p.35「②サハルの砂漠化と都市への人口集中」）、生徒たちは自然条件と社会条件から問題を冷静に分析し、両者の立論を考えていくことができる。

4. 課題

本稿では、北アフリカを素材に、現代社会で地図を利用する意義のある授業について提案した。現代社会でもすれば抽象的な概念の議論に終始しがちなところを、地図を用いることによって（当然地図も概念ではあるが）、生徒は空間的の広がりを持って自然条件と社会条件を概念化して考えることができる。すなわち、世界で起こる諸問題を日本人の感覚で考えるのではなく、現地の感覚でアプローチすることができる。このようにして少しでも問題の本質に近づくことで、日本の環境問題に応用することができる概念モデルを修得することができる。しかし、このような概念モデルから現代社会において重点がおかれる「対策」の部分については、未解決である。身近な取り組みと国際的な取り組みの違いは何か、日本人が海外で活動するならばどのようにすべきであろうか、などの問題点を、単なる制度の羅列や道徳ではない授業は可能か、すなわち空間認識を持ちつつ、一般的な概念モデルをつくることは可能であろうか。地図を利用した授業の開発が課題となる。

〈参考文献〉

- ジェンネについて
島田義仁・松田素二・和崎春日編『アフリカの都市的世界』世界思想社 2001年 第2章56頁
- ブルキナファソについて
池谷和信・佐藤康也・武内進一編『朝倉世界地理講座11 アフリカⅠ』朝倉書店 2007年 島田周平「アフリカ農村の日常的環境問題」p.28
外務省HP <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/burkina/data.html>
日本ユニセフ協会HP http://www.unicef.or.jp/osirase/back2009/0904_08.htm
- サヘルについて
石弘之『地球環境報告』（岩波新書）岩波書店 1988年 p.1~15
- 地名
21世紀研究会編『地名の世界地図』（文春新書）文藝春秋 2000年 p.185
- アフリカの農業システムについて
高橋伸夫・谷内達・阿部和俊・佐藤哲夫・杉谷隆編『改訂新版ジオグラフィ入門』古今書院 2008年 p.126